

ばてんがマシ

1985

3号

No 62

連絡先: 津田尚美: 長崎市

編集人: 葛西よう子

「学校の現場から」

荻田 玲子

「家庭科」と教科書の見直しをします。
「婦人に対するあらゆる形態の差別を撤廃する条約」に今年、日本政府は批准することとせられてゐるわけですが、「教育の分野における男女平等をすすめるべく、教育課程に反映している中学校における技術家庭の男女別学と、高校生の家庭科」のみ必修という問題とどうするか、色々の考え方の違いが出てきて、論争をよぶがこししています。
男女の役割固定を打破して、日常生活の中にも男女の平等があり、その上にも長期合意を目ざそうとする人々は、家庭科の男女共修必修、そして共に学ぶ共修を主張しており、一方、男女の役割固定を温存する気持ちと捨てきれない人々は、家庭科の男女共修に疑問をもち、現状維持を主張するとういふ場合、意見は大きく二つに別れてしましました。
この問題に際する検討会議の結論は、家庭科の男女共修必修をとり、男女共修必修の方向を選択し、これは男女の役割固定打破の正史の流れにそつたものとして評価出来るとしています。ただし、これできまるとしても、いけずはなくては、最終結論は、教育課程審議会にゆだねられます。
男女必修の「学習指導要領」が実際に出来上がる迄には、今から先、十年近い時間が必要とされ、せつ々の方向

付けも、さしせまった条約批准の役には立つが、実際の差別撤廃には、すぐにはむかひがたいという、うらみがあります。



私達教育の現場にいる者達は、昨年、から一年にわたって「家庭科の男女共修必修」とのようにならうかの討議を重ねて来ました。その結果、「家庭科」という教科書を今迄の様に家事、育児を中心と考えることも、この問題は解決しないこと、大きく生活(創造)学科と考える「男だろが、女だろが、人生の生活者としてどうあるべきか」とを問はせ、あわせて先人から伝へた生活技術文化の継ぎ手とさせることだと考えました。
今、家庭科の男女共修必修については、男には「男だろが、女だろが、人生の生活者としてどうあるべきか」という問いかけ、次に、次の問いかけがなされていきます。それは従来の家庭科の内容を根拠において、どうあるべきか、それで、これらの共修の基本視覚として、
一、身近な能力と生活能力管理
二、生活文化の継承と創造
三、生命の誕生と家族
四、生活と労働の関係及び性別役割分業の変革
五、連帯と共生の関係
以上の五つが、これをもとに学習内容が具体的に展開されるように考えられていきます。
これは、日本国憲法第三十五条に明記されている



1985 NGOFォーラム派遣！
国員募集！

「長崎県婦人対策室」より「国連婦人十年」を
はじき、最終年をむかえ、二十年の成果をとり、国際親善
を深めるための「国連婦人十年世界会議 NGOFォーラム」が
世界各地の婦人の参加の下にナイロビで開催される。この会議
が来ると、長崎県では、この最終年を記念して「NGOFォーラム」への
参加と西政先進諸国の視察、調査、現地婦人との交流を企
画している。その事です。

行先は ケニア(ナイロビ)、イギリス、スエーデン
期日は 七月五日から十五日、又会議の都合では十五日から二十日
国費 約六十五万円(内三十万円は県が補助する)
募集人員 八名(三十歳から五十歳)
三月三十一日までに、向に合ふかな？、もし行きたい方が
あれば連絡先迄、お電話下さい

えがりて

(EGGALITE コスス語で平等の意)
(発行：総理府、婦人問題担当室)

長崎県婦人対策室より毎月送られて来ます
今日号の内容は――
○主な婦人関係法改正の審議状況
○「家庭科教育に関する検討会議」の報告
○国政モニターアンケート調査「婦人の地位向上、政策決定への
参加等について」
e.m.c.

婦人展望

「市川房枝記念会出版部」発行
が毎月、ばそんウーマンの連絡所へ来ます
三月号の内容を紹介すれば――
(一) 婦人ニュース 各地の婦人達の同じく、なにか合点、僅かに
あるか、例えば、◇ギリヤの子供の国籍
は母系、◇氏名文化女性の知恵と電々
レディス総結集、◇国立鳥羽商船
高等女子学生受入れ
e.m.c.

(二) 昭和五十年、国の婦人関係予算(案)
(三) イタビユー、女性ではじめての都立南科短大の学長に選ばれる
久留都茂子 さん
e.m.c.

女の通信

あの「トイン青い母」を上映して以来、「長崎女の会」が
二月に一回発行する「女の通信」が又々やってきました
「女達の明日のために」 定章である女性達へのイタビユー
お祝いとして、お中元の葉刺師
吉田 猛子 さんの巻
会員のトイン便り
シリーズ「年と私」
お祝い「せ」の中の耳よりなニュースを二つ
四月十二日(金)夜、モスクワは涙を信じない！上映
e.m.c.

本の紹介を二つ
「私達の男、雇用平等法を信じて」
中島通子 編